親鸞教学の一指標

松原祐善

一

曾我量深先生の晩年講述された数多い述作のなかに『分水嶺の本願』と題する一六五頁にも充たない小冊子がある。今は『曾我量深選集』の第十一巻のなかに収められているが、私はこの小冊子に含蓄された課題も深く、いつ拝読しても深い感動をうけている。親鸞聖人が仰がれる『大無量寿経』の宗教、浄土真宗に遇えることの喜びを一層深めてくれるのである。この書の内容については、この冊子に寄せられた先生の序に

「一昨年初夏六月、恩師清沢満之先生の五十回忌の法要を終えて、北海道の旅に出で、今では日本の北端、国境の街、根室において、たまたま分水嶺の本願ということを感得せしめられた。本篇は同題の講述の聞書をまとめたものである。今般、上梓に当り謹んで深厚の師恩に感謝する次第であります。昭和二十九年六月　曾我量深」

と述べられている。いまこの序に一昨年初夏六月とあるのは昭和十七年の六月であるが、清沢先生のご命日六月六日を中心に五十回忌の法要が京都で盛大に営まれたのである。先生はそれに出席されて清沢先生讃仰の講演をなされた。本書の最初に置かれている「清沢満之とエピクテタス」というのが、その折の講演の聞書であることがいわれている。思うに曾我先生の清沢先生への思慕は晩年に及んでいよいよ切なるものがあった。特に昭和三十年の渡米からの帰朝

後、現代に於ける真宗の再興は清沢先生の「我が信念」や「絶対他力の大道」等を掲げて、先生の他力の自覚道を親鸞聖人のお聖教に照らさるべきことを語られたものである。いまこの講演にあっても、

「大体清沢先生出られるまでは、他力の信念などは誰も問題にしておらなかった。そこでもし清沢先生が出られなかったなら、我が親鸞などといふ方が今日のように、日本の思想界の最高峰であるというようなこととはならなかったのである。（中略）先生自身は仰言らぬが、思想的にそれを見れば、正しく生涯を捧げて戦いとられたのである。これは日本の仏教の歴史に長く残ることである。恐らく日本の仏教史の法然、親鸞以後の最も大きな事実として、私は信ずるものである。云々」（同書・六頁）

とあり、また

「今の真宗の学問は折角清沢先生が身を以て頂かせられた（『大無量寿経』の）下巻を忘れている。先生は臨終が近かづいてから、普通道徳と（真宗）俗諦門との交渉を述べられているが、あれは突然出てきたのではない。『エピクテタスの教訓』を読まれ、一方『阿含経』を読まれ、（『大経』）下巻を繰り返し綿密に読まれて後のことである。如来を信ずることによって自分等の相対有限を知り「分」を知り、「分」以内と「分」以外とを知ることができる。如来を知ることで「分」を知ることが出来る。南無阿弥陀仏で「分」を知ることができる。このこともちゃんと念頭においておられたであろうが、南無阿弥陀仏では講釈をなさらぬ。これは先生の時代では当然であろう。先生の教によって、聖典なり親鸞の言葉などを照し見る必要があらう。云々」（同書・一二頁）

と述べられている。

二

さて本書において第一章が「清沢満之とエピクテタス」と題されて、その劈頭に

「清沢先生の五十回の法要に遇うのは誠に不可思議の御縁である。これは先生が非常に短命であったということと、もう一つは自分が長命したという二つの因によって（当時曾我先生は七十八歳）、今日の日に遇うことが出来た訳である。

清沢先生は宗門改革の運動、即ち白河党の運動をなされた後、友人沢柳政太郎氏を訪ねられてから、始めて信仰の問題に新しい道が開けた。それまでは仏教の経典、特に『浄土三部経』、『阿含経』、『教行信証』、『歎異抄』と色々読まれたけれども、なかなか確固たる安心を得ることが出来なかった。たまたま沢柳政太郎氏を尋ねた時、『エピクテタスの教訓』という書を同氏宅で見つけそれを借りて読まれた。そして始めて分限ということを了解された。勿論先生は自分等が相対有限であるとは夙に考えておられた訳であったが、それは一般論であって、正しく御自身の問題になるとなかなか判然しなかったのであろう。それが『エピクテタスの教訓』を読まれて、始めて自己の分限を自覚することが――実際において自覚することが――真実の救済であると了解できたのである。それによって長い間仏教の教ゆる生死の問題について、解脱の道が見つかったのである。先生はその時の感激を「絶対他力の大道」として残されている。この文章は正に聖典である。云々」（同書・一―二頁）

と講演が始められている。

ここで私は清沢先生の宗教的廻心について少しく解説を加えておきたいと思う。明治三十五年（一九〇二）の『当用日記』の裏扉に、清沢先生ご自身の後半生を回顧して「回想」の文を草して

「回想す。明治二七・八年の養痾に、人生に関する思想を一変し、略ぼ自力の迷情を翻転し得たりと雖も、人事の興廃は尚ほ心頭を動かして止まず。乃ち二八・九年に於ける宗門時事は終に二九・三十年に及べる教界運動を惹起せしめたり。

而して三十年末より、三一年始に亘りて四阿含等を読誦し、三一年四月、教界時言の廃刊と共に此の運動を一

結し、自坊に投じて休養の機会を得るに至りては、大いに反観自省の幸を得たりと雖も、修養の不足は尚ほ人情の煩累に対して平然たる能はざるものあり。

三一年秋冬の交、エピクテタス氏教訓書を披展するに及びて頗る得る所あるを覚え、三二年東上の勧誘に応じて已来は、更に断えざる機会に接して修養の道途に進就するを得たるを感ず。

而して今や仏陀は、更に大なる難事を示して益々佳境に進入せしめたまふが如し。豈感謝せざるを得むや。」

（全集・第七巻四七五頁）

と表白されている。そしてこの文章の下欄に脚註されて

「二七年四月、結核診断。

養痾、法を得たるは沢柳、稲葉、今川、井上等諸氏の恩賜なり。

在播州舞子療養は二七年六月より二八年七月に至る。

二八年一月沢柳氏辞職

同夏有志建議。

二九年十一月、教界時言発刊。

阿含の読誦は教界時言を廃刊する前にあり。

三一年四月、教界時言廃刊。

三一年五月已降、断然家族を挙げて、大浜町西方寺に投ず。

三一年九月東上、沢柳氏に寄宿し、同氏蔵書中より、エピクテタス氏教訓書を借来す。

三二年五月、某殿、及び近角氏等、東上勧誘。

三三年に入り、月見、多田、暁烏、佐々木の四氏東上。」（前同・四七五頁）

と置かれている。そしてこの「回想」の文には明治三十五年（一九〇二）五月末と日附されているのである。この日はこれまでの東京の本郷・森川町の浩々洞の宿舎を、欧米視察の旅から帰朝された近角常観氏に譲りわたして、六月一日浩々洞が本郷・東片町一三五番地に移転する前日であることが知られる。そしてこの文の結びに「而して今や仏陀は更に大なる難事を示して益々佳境に進入せしめたまふが如し。豈感謝せざるを得むや」と結ばれてあるが、いかにも「大なる難事」の到来が予感されているようである。門弟の安藤州一氏は先生のこの東片町時代を語って

「先生の生涯は頗る多累なりしと雖も、東片町時代は如来を信ぜざる者よりして之を見れば、蓋し惨憺の極なりしなるべし。六月五日にはこの寓居に其の長男を失ひ、十月六日には郷里大浜に於て其の令閨に先だたれ、先生亦病漸く重くして、碧血屢々唇頭に溢る。しかも此間に於て西京の天地、風雲頗る急にして、先生に裁決を仰ぐの事項亦少なからざりき。盤根錯節に遇うて初めて刀の利鈍を知る。先生の所謂現在安住の信念は此時に於て、尤も明らかに光輝を発せられたり」（清沢満之全集第八巻・四三七頁）

と述べられている。先生の「回想」の文の脚註に更に三・四の事項を添えてみると、

「三三年九月、浩々洞の誕生、
三四年一月、雑誌「精神界」の発刊
三四年十月、巣鴨に真宗大学開校、満之初代学監（学長）に就任。
三五年六月、長男信一死去。
三五年十月、妻やす夫人死去。
三五年十一月、真宗大学学監を辞して帰郷。
三六年六月、先生歿。

ということになる。この「回想」の表白によれば明治二十七年（一八九四）六月より播州舞子の海岸に結核の療養され

たことが清沢満之先生の生涯を前後に劃せられたように読めるのである。

明治二十七年といえば清沢先生の三十二歳の時である。人生三十という頃は誰しも煩悩の最も深刻に興盛するときである。先生自身の言葉に

「修養の時期に際限なきも、三十前後最も其の大切なる年次たり。立志一たび誤たば一生為に蹉過せんなり。宗祖の元祖に行きたまひしは、実に偶然ならざりしなり。（此の時御年二十九歳なり）釈尊にも二十九出家説あり。此の時代や、血気盛んにして功名の念抑へ難し。況んや他より之を激要するに於いておや。」（『御進講覚書』全集第七巻・一〇九頁）

とある。清沢先生が精神の自由を求めて突如禁欲の生活に入ったのは二十八歳の頃であるが、その霊的奮闘は年々にその厳しさを増し、遂に不治の病に倒れて四年にして挫折したのである。この禁欲生活への動機について先生が小川空恵氏に語られし言葉として

「真宗の僧風は次第に衰頽せり、されば早晩中学校長を辞し、自ら墨の衣墨の袈裟、綿服を着、木履を穿ち各地を行脚し、宗門の真義を発揮して宗風の拡張を謀らんと欲すと。余曰く、両親日々老境に迫れり、之を養むがために猶三四年そのまま職に在りては如何と。氏曰く、人生朝露のごとし、今日あるを知りて明日あるを知らず、何ぞ三四年を待たん、不日余は実行すべしと。而してこの言ついに空しからずして、幾ばくもなく実行せられぬ」（全集第三巻・六八七頁）

といわれている。また人見忠次郎氏は

「師は毎度実験は面白き事である。実験によりて証明せらるる事ほど確実で、且つ人に納得させ易きものはないといわれ、種々の事を実験されたらしい。自分に寄せられたる書簡の中に此頃は某事につきて実験中なり云々という事が時々ありたり。師が曾て一枚歯の木履を穿ち墨染の衣を着して、暁夙く本山に参詣せられるのも、肉食

を廃して日を送られたるも、みな実験上聖道諸家の高僧の行状を研究せられたるものなる事はいうまでもなし」（全集第三巻・七〇五頁）

と述べられている。しばらく清沢先生の「略年譜」を簡単に拾ってみると

明治十一年（十六歳）一月、小川空恵師の勤めにて京都に入る、二月覚音寺衆徒として得度をうけ、三月東本願寺の育英教校に入学、稲葉昌丸、今川覚神等と相知る

明治十四年（十九歳）十二月、本山より東京留学を命ぜられ稲葉昌丸、柳祐久と共に上京、

明治十五年（二十歳）一月、東京帝国大学予備門第二級に編入学、同級に岡田良平、一級下に沢柳政太郎の友を得る。

明治二十年（二十五歳）七月、東京大学文学部哲学科を卒業、大学院に進みて宗教哲学を専攻す。側ら第一高等学校に講師、先輩の井上円了師の哲学館にて哲学の講義を担当。本郷西片町に一家を構えて名古屋より両親を迎える。

明治二十一年（二十六歳）七月、東本願寺の命に依り、京都府立尋常中学の校長として赴任。

兼ねて高倉大学寮に哲学を講ず。八月清沢やすと結婚。

さて東京より京都へ赴任の先生は心境を人見忠次郎氏に

「人は恩義を思はざるべからず。所謂四恩を説くの人は多きも、其の有難味を解し、之に報ぜんことを思ふものは必ずしも多からず。人にして他より受けたる恩を解せず、之を解するも、其の之に報いんことに思い到らざるものは、人の人たる所以にあらず。余は国家の恩、父母の恩はいふまでもなく、身は俗家に生れ、縁ありて真宗の寺門に入り、本山の教育を受けて今日に至りたるもの、この点に於いて、余は篤く本山の恩を思ひ、之が報恩の道尽さざるべからず」（全集第三巻・六〇九頁）

と語られていた。

明治二十三年（二十八歳）七月、中学校長を辞して後任を稲葉昌丸氏に託す。これより禁欲主義の実行を始む。高倉大学寮の哲学の講義及び中学の授業は継続す。この頃真宗の仮名聖教、ことに『歎異抄』に親しむ。

明治二十四年（二十九歳）十月十三日母たき歿。禁欲にきびしさを加えて行者生活を送る。

明治二十五年（三十歳）本山当局両堂再建の負債整理に忙殺されて教学を顧みず。これを概嘆して稲葉昌丸、井上豊忠氏等と教学の独立を主張建議す。八月「宗教哲学骸骨」を出版す。

明治二十六年（三十一歳）七月伊勢二見ヶ浦の関西仏教青年会に講師として迎えられ、京都より徒歩旅行す。八月シカゴ万国博覧会に、英訳『宗教哲学骸骨』が好評をうる。九月京都尋常中学を府へ返還して大谷尋常中学を開設し、校長兼真宗大谷派教学顧問に親友沢柳政太郎氏を招聘す。

明治二十七年（三十二歳）一月十五日厳如上人遷化。その葬儀に感冒に犯さる。四月、結核診断。六月、友人のすすめにより播州・舞子の東、西垂水村に転地療養す。

三

さて先きの回想の文にもどりて、二十七・八年の養痾に略ぼ自力の迷情を翻転すと記されているが、このことに相照らして当時舞子の療養日記である先生の『保養雑記』を繙くと、喀血の病床に死と対決しつつ死生相代の理を観じ、生死一如の境に住せんと工夫されている。また沢柳政太郎氏から、贈られた『和漢高僧伝』を読み、南岳の慧思、浄影寺慧遠、天台の智顗、南山の道宣、光明寺の善導の五師の高風を慕い、その行状を数えている。更らに九月三十日の記に

念仏〈諸行随一——観経——十九　当今此機尚稀
　　万善不共——小経——二十　況。
　　唯信後行——大経——十八　更況。（全集第五巻・六〇頁）

と表示して如実の念仏の容易でないこと、すなわち念仏は極難信の法であることを表白されているのである。かくしてこの病床に於ける内省は真宗の宗意安心の核心へと向けられてゆくのである。断肉清独、これ宗旨の要素にあらずと断定し、「円頓極乗の宗旨は唯信の一要のみ、此信発して念仏となり、自然と多念に及ぶもの」といい、やがて極悪最下の機こそ信の一念に即得往生を体得し、自力を捨てて他力に帰し、まことに信に死して新しく如来の本願に蘇みがえることが出来た。ここに「愚蒙の改悔それ此の如し、穴賢々々」（全集第五巻・六八頁）と懺悔表白して、愚に徹して獲信の喜びを得られたのである。而して翌二十八年の一月に入りて、浄土真宗の宗義の大綱をまとめて『在床懺悔録』（全集第四巻・三五八―三九一頁）を綴り、二月より三月にわたって『他力門哲学骸骨試稿』（同前・三九二―四六九頁）をものされている。同年七月に入り少康を得て舞子の療養から京都にもどられるのであるが、十月に入っての作であるが「六花翻々」（全集第五巻・八七―九四頁）に

「他力の信心、仏智廻向の信心なり。

当今の大謬は、人語の上に安心を求むるに存す。人語如何に完美なるも、尚ほ且つ真正なる安心を賦与するに足らず。況んや末学煩鎖の言句を以てするに於いておや。

安心の源泉は言句にあらず、文字にあらず、末学にあらず、列祖にもあらず、否宗祖と雖も

応信如来如実言

唯可信此高僧説

と教ふるのみ。

○

宗教の快楽は無限に対する快楽なり。

無限は常在なり。故に宗教の快楽は求むる時に得られざるなし。

無限は遍在なり。故に宗教の快楽は求むる処に得られざるなし。
世俗の快楽は有限に対する快楽なり。
有限は辺際あり。故に時に存するも必ず亡す。
有限は窮極あり。故に一処にあるも他処に欠く。

○

無限の快楽は、無限人に対するも無限なり。千万億人と雖も、同じく円満の享楽あり。
有限の快楽は、一人之を専にするときは、他人は之に参ずる能はず。多数の人に分配するときは、其の比例に減少するなり。

○

子孫の計

是れ最も人類の苦労する所なるか。
仏教の信者は因果業報を信ぜざるか。人の生るるや必ず其の果報を携へ来るにあらずや。其の出生長育得業、因より父母の関する所なりと雖も、而も父母は全然之を左右し得るものにあらざるなり。仏教の信者たるものは及ばざることに苦悩して痛心するを止めて、自らの果報を確信して、其の可及的範囲に就いて、其の義務を尽すべきのみ。

○

各自の果報

農工商吏、生れながらにして定まるものあり、定まらざるもあり。定まるも定まらざるも共に果報の灼然たるを示すものにあらずや、果報を恐れて之を敬せば、無限の楽其の内にあり。（恐敬の念、亦た不可思議なる果報連

鎖の一分たり得ればなり。）

○

仏心者大慈悲是

如何が之を実行せん。

現世の果報は、業因の定むる所たるを確信せば、其の滅するものは必ず反りて補足するを知らん。然らは則ち、余裕を以て乏者に浴する、豈に難事ならんや。而も社会の変遷は、将に虚無共産の党人を産ぜんとす。夫れ、之が警戒を要する今日の急務は、富者の先んじて

国家的社会主義を宣揚するにあるか。」

等の感銘深き言葉を拾うことができる。

四

次に「回想」の文の脚註に

「二八年一月、沢柳氏辞職。

同夏有志建議。

二九年十一月、教界時言発刊。

阿含の読誦は教界時言を廃刊する前にあり。

三一年四月、教界時言廃刊。」

と記されている。ここに沢柳氏辞職とあるのは、明治二十六年九月に、京都府尋常中学校は京都府へ返して新しく大谷尋常中学校と改称して再出発するのに際し、これまでの校長の稲葉昌丸氏は校長を辞任して、東京から沢柳政太郎

氏を大谷尋常中学の校長として招聘し、大谷派の教育事業の顧問をも兼ね、稲葉氏は当時新しく中学に招かれた今川覚神氏と共に新校長を援けたのである。これには清沢先生が与って力があり苦心のされたところである。こうして新学事の体制が出来上って大いに教学振興の策が講ぜられることになった矢先に大谷中学にストライキが勃発し本山当局は遂に二七年十二月に沢柳氏を解雇したのである。脚註の二八年一月沢柳氏辞職とはそのことである。清沢先生は一月四日の記に「恭賀新正」に添えて

「諸方よりの来諭にも、万事を放下して悠々保養すべしとあれども、未尽地の菩薩未だ煩悩の突撃を免れず。否、大いに之が為に我が良田を占領せられて、漸く余地なからんとす。あはれ死せん頃には、犬か猫にも劣りやせん。如かず、一度山下の時事を拝聞して、或は憤慨の為に病み、又死するも亦た犬猫病死するに勝らずやとは申ものの、御邪魔を願ひ候は恐縮に不堪候云々」

と誌し、次の日に

「陳ば沢氏弥々払袖、諸君も甚だ面白からぬ事情有之候趣、今朝同氏より来信、喫驚仕候。事体如何の儀に候や。今日にては到底調停恢復の縁無之候哉。折角今日までに至りし事、且つは門外漢に対し、昨は大いに奮って之を聘用し、今は則ち忽ち解嘱の止むを得ざるに至る。一山の醜を天下に露するものに候はず哉。誠に憤慨の限りに候。就いては諸君の御意見は如何に候哉。執事の意見教学部の意見は如何に候哉。大本山の下、諸賢位の在臨中にあって、突然此の始末に相成候とは、あまりに頼りなき儀に候はずや。何卒〳〵小病には御懸念なく、這回の顚末御一報願度懇願切望此事候」（全集第五巻・一〇五頁）

と稲葉昌丸、今川覚神、井上豊忠氏の三氏に宛て、この書簡を送られたのである。次の「同夏有志建議」と脚註にあるのは、先生は病気が少康を得たので七月一日に療養地の舞子を引払われて京都へもどり稲葉氏のもとに身を寄せられ、直ちに二月には井上、清川、今川、稲葉氏等との会談がはじめられている。ここでの「同夏有志建議」のことは、

二八年七月九日の日附で、今川覚神、稲葉昌丸、徳永満之、井上豊忠、清川円誠、村上専精、藤谷還由、藐姑射貫之、柳祐信、小谷真弓、太田祐慶、南条文雄の有志名で本山当局の執事渥美契縁に宛て、「建言」書を送っている。そのなかに

「某等熟々、吾が大谷派の現状を考察致し候に、今や負債償却と両堂再建との二大事業は、共に其の嫁を告げ候折柄に候へば、一派将来の為の一大革新を実行すべき時機、正に至れりと存じ候。今日に在りて当に為すべき事業、一にして足らざるべく候へども、万事に先だち予め一宗の教学の根底を鞏固にするを以て、最大急務と存じ候。即ち学事に在りては、中学の教育を普及して適任の住職を養成し、大学の規模を拡張して有為の学者を陶冶し、又教務に在りては教区の制を確立して其の統属する所を明らかにし、本末貫通して布教の実務を全くし、斯の如く教学相応して秩然たる有機的行動をなし候はば、庶幾くは大法宣揚の基礎を定むるを得べき事と存じ候」

の文章に始められ、当時の門末の実況は多数の僧侶は教学方針の那辺にあるかを知らず、座班の高下法衣の色章等競うて、子弟の教育、門徒の教導を忘れ、このままでは一派の衰微は免るることはできない。今にして此の形勢を挽回する法を立てなければ遂に救うべからざるにいたる。今後は教学を以て本山の寺務方針とし、当路者は一大決心を以て人心を一転せしむる処置をとるように、その革新の方途が述べられているのであるが、その結びの言葉には

「蓋し方今宇内の大勢たるや、人心の帰向、漸く仏教に集りつつあるは、歴々其の事実乏しからず。苟くも仏教伝道其の宜しきを得候はば、将来仏教をして宇内を風化せしめんこと敢て難事に無之と存じ候。而して能く此の大任を全くするに堪ふるものは、印度の仏教にあらず、支那の仏教にあらず、唯だ我が帝国の仏教あるのみに候。我が帝国の仏教亦た一宗一派に止まらずと雖も、此の大希望を嘱すべきもの、恐らくは真宗東西両派を措きて他に求むるべからざるやに存じ候。果して然らば我が派たるもの、居常此の大勢に鑑み、其の任務を忘れず、苟くも時機の乗ずべきあらば、其の施設を怠るべからざる儀に候。今や負債償却と両堂再建との二大事業は、共に其

の竣を告げ、進みて一派の大任を尽し得べき運に達し候は、実に千載の一時、革新の好機会に有之候へば、区々の情、敢て不遜を顧みず、聊か愚見の要領を略陳仕り候。」（全集・第五巻二五六頁）

と述べられている。かくして再び回想の文にかえれば

「人事の興廃は、尚ほ心頭を動かして止まず、乃ち二八・九年に於ける我が宗門時事は、遂に二九、三十年に及べる教界運動を惹起せしめたり」

と述べられ、そこに「二九年十一月教界時言発刊」と脚註が置かれている。先生の教界革新運動の志願とするところは、勿論已むに已まれず大谷派の宗門時事よりして病後の身を提げて起ち上られたのであるが、この『教界時言』の刊行を通して世に問われたのである。その創刊の第一号の社説は「教界時言発行の趣旨」と題して述べられているが、その文章のなかに

「蓋し我が大谷派は我が邦現代に於ける主要なる一勢力にして、其の興廃消長は、之を国家社会の利害よりするも、之を派内本末の得喪よりするも、余輩の雲煙過眼視する能はざる所なり。況んや大谷派本願寺は余輩の拠って以て自己の安心を求め、拠って以て同胞の安心を求め、拠って以て世界人類の安心を求めんと期する所の源泉なるに於いておや。云々」（全集第四巻・一七八頁）

という言葉を見出すことができる。先生は大谷派宗門に現代に於ける釈迦仏の僧伽の生命を仰いで居られるのである。而して第三号の社説には「革新の要領」と題して

「抑々余輩の所謂根本的革新なるものは、豈に唯だ制度組織の改良をのみこれ云はんや。否、制度組織の改良は寧ろその枝末のみ。其の称して根本的革新というものは、実に精神的革新に在り。即ち一派従来の非教学的精神を転じて教学的精神と為し、多年他の事業に専注したる精神をして、一に教学に専注せしむるに在り。夫れ教学は宗門命脈の繋る所、宗門の事業は教学を措いて他にこれあるを見ざるなり。財政の整理や内事の粛正や亦た皆

此の教学の振興の為の故のみ。故に宗門の当路者たる者は常に教学の二字を其の脳底に牢記して須臾も之を忘失すべからず云々」（全集第四巻・一九一頁）

と述べている。第四号社説の「師命論」には

「師命なる哉。師命なる哉。余輩は一日も師命を傷つけられざらんことを庶幾せざるはなし。若し夫れ師命にして一瑣事一私人の間に発せらるることあらんか、是れ当路者が師命を強請し一瑣事一私人の為に濫用したるものならずんばあらず。固より尊慮より出でたるに非ざるは確かなり。何となれば法主の尊慮は一瑣事一私人の為に動くが如き不公明なるものに非ざればなり。法主の尊慮は公明なり、正大なり。公明正大に非ざるものは……これ已に真の師命に非ざるなり。云々。」（全集第四巻・二一二頁）

と述べている。また第十一号社説には「大谷派宗務革新の方針如何」と題する文章の中に、

「巍々たる六条の両堂、既に大谷派と為すに足らず、地方一万の堂宇、既に大谷派と為すに足らず、三万の僧侶、百万の門徒、亦た直ちに大谷派と為すに足らずとせば、大谷派なるものは抑々何の処にか存するのか。曰く大谷派なる宗門は大谷派なる宗教的精神の有する所に在る。豈に人員の多寡を問はんや。豈に堂宇の有無を問はんや。将た其の顧を円にし、其の袍を方にすると否とを問はんや。苟くも此の精神の存する所は即ち大谷派なる宗門の存する所なり。而して大谷派なる宗門の盛衰は、実に此の精神の消長に外ならず。今や一派の現状を通観するに、本山の威信は日に減じ、僧侶の価値は日に降り、布教振はず、勧学挙らず、紀綱弛み、風俗乱れ、上下を挙げて名利奔走に忙はしく、真誠なる宗教動作を見んと欲する得易からず。而して其の由りて来る所を討ぬれば宗教的精神の衰退に帰せずんばあらず。それ即ち一派今日の弊根にして革新の要は此の宗教的精神を振作するに在り。云々」（全集第四巻・二九二頁）

と述べて、先生にありては教学と教団とは不二にして離れず、教団は教学に照らされ、教学に導かれ、教学はもと教

団と共に生れて教団の展開と離れることがない。先生の革新運動も教団の現実の壁に阻まれて遂に挫折を見たのであるが、この挫折は無論先生の場合は決して宗門に対する絶望ではなかった。当時先生が河野法雲氏に語られた言葉に

「実は是だけの事をすれば、其の後には実に何もかも立派に思ふことが出来ると思ってやったのだけれども、然し一つ見おとしがあった。それは少部分の者が如何に急いでもあがいても駄目だ。よし帝国大学や真宗大学を出た人が多少あっても、此の一派――天下七千ヶ寺の末寺――のものが以前通りであったら、折角の改革も何の役にもたたぬ。初に此のことがわかって居らなんだ。それでこれからは一切改革のことを放棄して、信念の確立に尽力しやうと思ふ」（全集第五巻・六二二頁）

と述べられたとある。この改革運動の破綻に先生は一層自己の信念の自覚を深められてゆかれるのであるが、明治三十年十一月、大谷派事務革新全国同盟会を解散し運動は三十年十二月にとりやめ、『教界時言』も三十年十二月の第十四号から規格も菊版から四六版に改められ内容も一般の仏教界思想界に向って喚びかけられている。三一年一月の社説には「仏教者盍自重乎」、二月には「教界回転の枢軸」等、力の籠った論稿が載せられている。

五

さて清沢先生の『四阿含』の読誦について、「回想」の文では「三十年末より三一年始めに亙りて『四阿含』を読誦し」とあって、その頃先生は再び喀血の病床に臥せられることであるが、明治三一年一月にはじまる『病床雑誌』（全集第七巻・一四〇頁）には、三一年一月二十二日（陰暦一月一日）より「増一阿含」を読みはじめ三一日に終り、三月一日より『中阿含』、十七日より『長阿含』、十九日より『雑阿含』に入り、二月二五日に終っている。引き続き『本行集経』を繙き釈尊伝に触れられるのである。後日先生は『転迷開悟録』（全集第七巻・六四頁）に「阿含感」と題して

余が『阿含』を読誦して特に感の深かりしは、喀血襲来の病床にありしが為か。然らば教法の妙味に達せんとせ

ば、生死巌頭の観に住すること尤も必要たるを知るべし」（全集第七巻・八三頁）

と述懐されているが、このことは必ずしも阿含読誦の場合には限らないであろう。先生の仏教はつねに、生死巌頭に立つ現実の只中に学びとられたのであって決して装飾的な学問教養ではない。東京大学で始めて阿含仏教を講ぜられた姉崎正治氏は

「清沢師に親しく接したことは只一回、二見浦にて師が、阿含小乗と人は貶すれど、見る人の心次第にて其の中に大乗もあり、他力門も存せりといわれた一語、今尚耳底に響き、近来僕が信仰の為に求めんとしつつ努力する間、髣髴の間に得たる光明は益々此の言の真摯の経験に出でしを悟らしめ、数日前に恰も此の事を語りしなり。」

（明治三十六年十月六日暁鳥敏宛書簡）

と記している。約一ヶ月にして『四阿含』を読了した先生は、更らに『本行集経』を繙かれるのであるが、『病床雑誌』には二月二十六日の記に

晴。風寒。読二仏本行経一。至二太子出家入出之処一、悲絶哀絶、冷眼亦不レ覚二暗涙湿一。而菩薩之決心、凜乎不動、百千諍諫、無レ有二微効一、但倍煥二発大聖智懐熱誠一而已。嗚呼難レ値難レ遇、如来出世、億劫値遇、真個宿縁、吾人何幸、得レ聞二大法一、豈可レ不二勤精進一、宜当二献身捨命、以為レ法尽瘁一也。

と記している。当時この感動を井上豊忠氏に宛て、

「頃日、『本行集経』を繙き、悉達太子の出家修道の事歴を玩誦致候に、恩愛の纏縛は何処にても変ることなく、情義の難断は高貴の人にありては却て重甚なるを認め候。而して彼の王使の諫争を呈するに当りては、切々皮肉に入り層々悲哀を加へ、人をして感極りて悶絶せしめんとするに至る。その間にありて太子の容貌如何。所謂泰然如山、威風凜々、設ひ山岳は動転し得べきも、設ひ海洋は乾燥し得べきも、我決心は移す可からずと宣言したまふの一段に至りては、在病の寒生も覚えず涙痕の衣襟を潤すを認め候。嗚呼末世の大法の振興せざる、果して

誰人の過ぞや。御多忙の中へ釈迦に説法めきたる事を書き連ね失敬々々。只小生近日の幸楽は病隙に聖経を拝見して、大聖の叱咤を感ずる事に有之、聊か其恵慶を分呈の積りに有之候」（全集第八巻・六頁）

と書き送られているのである。先生にありては親鸞聖人に皈えることは釈尊に皈えることであり、釈尊と聖人を直結することである。阿含の簡明な諸行無常、一切皆苦、諸法無我の教法も尊いが、更らに釈迦世尊の歩まれたその伝記そのものに何よりも宗教のあるべき正真のすがたが仰げるようである。「パンの為、職責の為、人道の為、国家の為、富国強兵の為に、功名栄華の為に宗教あるにはあらざるなり。人心の至奥より出づる至盛の要求の為に宗教あるなり。宗教を求むべし、宗教は求むる所なし」（『御進講覚書』全集第七巻・一一〇頁）とは釈尊の出家求道のすがたに学ばれたのであり、明治三十四年十一月号の『精神界』に、「宗教的信念の必須条件」という論稿を寄せられているが、そのなかに

「真面目に宗教的天地に入らうと思ふ人ならば、釈尊がその伝記をもって教へ給ひし如く、親も捨てねばなりませぬ、妻子も捨てねばなりませぬ、財産も捨てねばなりませぬ、国家も捨てねばなりませぬ、進んでは自分其の者も捨てねばなりませぬ。語を換えて云へば、宗教的天地に入らうと思う人は、形而下の孝行心も愛国心も捨てねばならぬ。其の他仁義も、道徳も、科学も、哲学も一切眼にかけぬやうになり、茲に始めて宗教的信念の広大なる天地が開かるるのである。」（全集第六巻・一四三頁）

と述べられている。

六

次いで「回想」の文にかえると、

「三一年四月、『教界時言』の廃刊と共に此の運動を一結し、自坊に投じて休養の機会を得るに至りては、大い

に反観自省の幸を得たりと雖も、修養の不足は尚ほ人情の煩累に対して平然たる能はざるものあり。」

と述べられ、「三一年五月已降、断然家族を挙げて大浜町西方寺に投ず」と註記しておられる。ここに断然家族を挙げてという言葉が強く響くのであるが、そこにはやや複雑な家庭の問題があり、先生はもと徳永家の長男であり、西方寺の清沢家へ養子された形になってはいるが、実父徳永則翁を負うておられるのである。いまは改革運動に失敗し、僧籍からは除名され、しかも病床に倒れておられる先生には、実父をいかに養うべきかが問題であった。稲葉昌丸氏の執成しで実父と共に西方寺に入ることに決定したのである。断然とはそのことをいわれるのであるが、西方寺へ迎えられたものの実父は頑固一徹の老人であり、わが身は難治の肺病をかかえている病である。西方寺門徒の中には先生を嫌い、ときには先生を寺から追放せんとまでしたのである。「修養の不足は尚ほ人情の煩累に対して平然たる能わず」とはその間の深刻な悩みを告白されているようである。ここで先生はご自分の号を「臘扇」と改められ、黙忍堂と呼んでおられる。臘扇とは臘月（十二月）の扇ということで正に不要の者ということである。しかも尚当時先生には信仰の内面に今一つ徹底を得ない問題が残されていたといわれるのである。その苦悩の課題を超えしめた機縁はエピクテタスの教訓書（The Teaching of Epictetus by T. W. Rolleston）であったのである。私は当時の先生の日記である『臘扇記』（全集第七巻・三四三―四六四頁）によってそれをあとずけてみたいと思う。

「回想」の文では「三一年秋冬の交、エピクテタス氏教訓書を披展するに及びて頗る得る所あるを覚え、三二年、東上の勧誘に応じて已来は、更に断えざる機会に接して、修養の道途に進就するを得たるを感ず」とあり、その脚註として「三一年九月東上、沢柳氏に寄宿し、同氏蔵書中より、エピクテタス氏教訓書を借来す。三二年五月、某殿及び近角氏等、東上勧誘。三三年に入り、月見、多田、暁烏、佐々木の四氏東上」と置かれている。そのエピクテタスとの出逢いについて当時稲葉昌丸氏に宛てられた書簡には

「今回沢（註、沢柳氏）氏方にて、羅馬の大哲エピクテタス Epictetus 氏の遺著借来読誦致居候（中略）。

『死の恐怖を除去せよ。思うままに雷電光りはためくと想へ、斯くて爾は気静神間の主宰才能中にあるを知るなるべし。

虚主は何をか鎖がんとする、脚のみ。渠何をか奪はんとす、首のみ。渠の鎖ぐを得ず奪ふ得ざるものは何ぞ、意念是なり。是れ即ち古聖人の「自己を知れ」の格言を訓うる所以なり。

如意なるものと不如意なるものとあり。如意なるものは、意見動作及び欣厭なり。不如意なるものは、身体財産名誉及び官爵なり。己の所作に属するものと、否らざるものとなり。

疾病死亡貧困は不如意なるものなり。之を避けんと欲するときは、苦悶を免るる能はじ。

疾病は、身体の障害にして意念に関するにあらず。事の起る毎に、冥想一番せよ。是れ或る物に対する障害にして、爾自身に対するに非ざるを知るなるべし。』

激励的の語句頗る圭角あるが如しと雖も、我等が胸底の痼疾を療治せんには、其の効能決して尠からざるものと存候。死生命あり富貴天にあり、其れエ氏哲学の要領に有之様被思候。此は大兄に対する東京みやげの積りに有之候。呵々。」（全集第八巻・二三頁）

と書き送られている。この書簡の日附は十月十二日となっているが、これを当時の先生の日記である『臘扇記』に照らしてみると、十月十二日の記に、『エピクテタス教訓書』より

○如意なるものと不如意なるものあり。如意なるものは、意見、動作、及び欣厭なり。不如意なるものは身体、財産名誉及び官爵なり。己の所作に属するものと、否らざるものとなり。如意なるものに対しては吾人は自由なり。制限、及び妨害を受くることなきなり。不如意なるものに対しては吾人は微弱なり、奴隷なり、他の掌中にあるなり。此の区分を誤想するときは、吾人は妨害に遭ひ悲歎号泣に陥り、神人を怨謗するに至るなり。如意の

区分を守るものは、抑圧せらるることなく、妨害を受くることなく、人を謗らず、天を怨みず、人に傷つけられず、人を傷つけず、天下に怨敵なきなり。

○疾病死亡貧困は不如意なるものなり。之を避けんと欲するときは、苦悶を免るる能はじ。土器は破損することあるものなり。

○奴隷心にして美食せんよりは、餓死して脱苦するに如かじ。

○無智と云はれ無神経と云はるるを甘んずるにあらずば、修養を遂ぐる能はざるなり。

○自由ならんと欲せば、去る物を逐ふべからず、来るものを拒むべからず。（他に属するものを欣厭すべからず。）

○天与の分を守りて、我が能を尽すべし。分を守る者は徴兆を恐れず。（常に福利を得るの道を知ればなり。）

○必勝の分（如意の範囲）を守るものは争ふことなし。

○誹謗を為し、打擲を加ふるもの、我を侮辱するにあらざるなり。是等に対する我が意見が我を侮辱するものなり。

○哲学者たらんと欲するものは、人の嘲罵凌辱を覚悟せざるべからず。

○人を楽しましめん（迎合）として意を動かすものは、修養の精神を失脚したるものなり。」（全集第七巻・三七一頁）

等の引用文が置かれ、次いで先生の思索を経たる語句が見られるのである。十月十八日の記に

「吾人は一個の霊物なり。只だ夫れ霊なり、故に自在なり。（意念の自在あり。）只だ夫れ物なり。故に不自在なり。（外物を自由にする能はざるなり。）而も彼の自在と此の不自在と、共に皆絶対無限（他力）の所為なり。共に是れ天与なり。吾人は彼の他力に信順して、以て賦与の分に安んずべきなり。」（全集第七巻・三七六頁）

と述べられている。次の日には

「我にあるものは、我れ得て之を左右するを得。是れ意念を云ふなり。

彼に在るものは、我れ得て之を左右する能はず。是れ身、財、名、爵（名利、爵禄、死生、疾病）を云ふなり。」（前同・三七六頁）

とあり、更らに

「彼に在るもの対しては、唯だ他力を信ずべきのみ。我に在るものに対しては、専ら自力を用うべきなり。而も此の自力も亦た他力の賦与に出づるものなり。」（前同・三七七頁）

と記している。ここに自力、他力の分別について先生独自の領解が述べられているのである。思うにエピクテタスは自力主義の自己克服の道を策励したのであって、その道は嶮難で生やさしいものではないのである。而してその道には必ずしも宗教的信仰を要求することはなく、只管自力の修道によって真の自主独立の自在人を打出するにあった。清沢先生はエピクテタスの語録に導かれて、人間における相対有限の分限の自覚を知らされ、この分限の自覚に絶対他力の金剛不壊の信念を確立してゆかれたのである。かくして

『臘扇記』の十月二十四日の記

「如何に推考を費すと雖も、如何に科学哲学に要求すると雖も、死後（展転生死の後）究極は、到底不可思議の関門に閉ざさるるものなり。

啻に死後の究極然るのみにあらず。生前の究極も亦た絶対的不可思議の雲霧を望見すべきのみ。是れ吾人が進退共に絶対不可思議の妙用に托せざるべからざる所以。

只だ生前死後、然るのみならんや。現前の事物に就いても其のダス、ワス Das Was デスヴルム Des Waum に至りては、亦只だ不可思議と云ふべきのみ。

此の如く四顧茫々の中間に於いて、吾人に亦た一団の自由境あり、自己意念の範囲即ち是なり。γνωθι σεαυτον "Know Thyself is the Motto of Human Existence" 自己とは何ぞや。是れ人生の根本問題なり。

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に此の境遇に落在せるもの、即ち是なり。

只だ夫れ絶対無限に乗托す。故に死生の事、亦た憂ふるに足らず。死生尚ほ且つ憂うるに足らず、如何に況はんや、此より而下なる事件に於いてをや、追放可なり。獄牢甘んずべし。誹謗擯斥、許多の凌辱、豈に意に介すべきものあらんや。否な之を憂うると雖も、之を意に介すと雖も、吾人は之を如何ともする能はざるなり。我人は寧ろ只管絶対無限の吾人に賦与せるものを楽しまんかな。

「自覚の内容なり。此の自覚なきものは、吾人の与にあらざるなり。

絶対吾人に賦与するに善悪の観念を以てし、避悪就善の意志を以てす。（所謂悪なるものも亦た絶対のせしむる所ならん。然れども吾人の自覚は避悪就善の天意を感ず。是れ道徳の源泉なり。）吾人は喜んで此の事に従はん。

何ものか善なるや、何ものか悪なるや。他なし、吾人をして絶対を忘れざらしむるもの、是れ善なり。吾人をして絶対に背かしむるもの、是れ悪なり。而して絶対は吾人に満足を与へ、反対は吾人に不満を与ふ。故に満足を生ずるものは善なり。不満を生ずるものは悪なり。満足あれば無慾心あり。無慾心あれば不動心あり。不動心あれば胆勇あり。胆勇あれば無畏心あり。無畏心あれば精進あり。精進あれば克己あり。克己あれば忍辱あり。忍辱あれば不諍心あり。不諍心あれば（無瞋心あり。無諍心あれば）和合心あり。和合心あれば社交心あり。社交心あれば同情心あり。同情心あれば慈悲心あり。大慈悲心は是れ仏心なり。

「以下対他人的」

「以下二対自身的」

「以上対外物的」

（一）帰命心（信仰）。（二）満足心（知足安分）。（三）無慾心（無人慾之私）。（四）不動心（我能不動我心）。（五）不惑心。（六）無畏心。（七）精進心。（八）克己心。（九）忍辱心。（十）不諍心。（十一）和合心（温良恭謙譲）。（十二）

社交心。（十三）同情心。（十四）慈悲心。（十五）仏道心。」（全集第七巻三七九―三八二頁）

と誌されている。以上先生の「回想」の文をあとずけて、明治二十七・八年の養痾に人生に関する思想を一変し、自力の迷情を翻転して絶対他力に帰せられたのであるが、更らに『阿含経』の読誦、エピクテタスの語録に導かれて、絶対他力の信念が明治三十一年に及んで揺るぎなき真の確立を得たものといえるであらう。この宗教信念を拠としてその後の東京に於ける先生最晩年の精神主義運動が展開され、明治の仏教界に潑剌たる霊的生命の息吹きを吹込んだのである。ここに清沢先生とエピクテタスとの出逢いについて曾我先生は『分水嶺の本願』には

「エピクテタスは長い間の身心の戦いによって、己に属するものと、己に属せざるものとを区別することを了解した。しかしそれは何によって、そのように分けることができるかという問題になるとエピクテタスは随分長い生涯の間の悩みであった訳である。清沢先生は幸にも、エピクテタスに逢う前に、已に仏教によって如来ということ、如来の大悲ということを教えられていた。それがあるので先生は、エピクテタスの教訓が一読のもとに自分のものとなったのであろうと推察する訳である。如来は我等に自己の分限を教えて下さる。我等は如来を信ずることによって、自己の分限を知らしめて頂くと、先生は短い生涯を信念の確立のために一切を捧げられた訳である。先生の絶対他力の信念は、我々第三者から見ると、全くそれは戦いとられたのであると頂いている。しかし、先生御自身から見るとあの劇しい戦いも、あの生死の問題の解決も、あの倫理の厳しい対決も、全人生をあげての究明も、決して先生御自身では戦いとったとは、了解しておられなかったに違いない。無限大悲の廻向したまうところで全く自分の力ではない。いささか戦ったとしても、その戦力はこれも亦如来他力の賦与したまうところであると、内外併せて一切を無限他力の賦与したまうところと、自分の力のいささかもないという、間違いない最後の安住を得られた訳である。云々」（同書二―四頁）

と述べられあるが、げにもと深く頷けるところである。